f-Reグラフ

・実測値と理論値のずれはほぼない(だいたい線上にのってる)

・4㎜は層流の線、10㎜は乱流の線、６㎜は半々くらい。

・この理論値の交点から臨界Re数を求める。→1187くらい。おかしい。。。

　層流の16／Reは速度分布が放物線である前提。このRe数は層流→遷移域の臨界なのでは？

　ある一点ではっきり分かれるのではなく、交点付近では別の式がなりたっているような、、、

log ΔP,log uぐらふ

・4㎜、6㎜、10㎜ではっきり線が分かれた。傾きも結構違う。→流れ状態は三つで異なる

傾きから、4→10→6の順に乱流ぽい

ｆ－Reグラフは対数軸だから載ってるようにみえてじつは結構測定誤差大きい→二つのグラフで得られる結果がことなる

(ｆ－Reだと6ｍｍのほうが層流に近い（Re数が小さいので）)

管壁そのものの摩擦係数を考えてない

臨界レイノルズ数おかしい件→Moody線図のように、交点(16/Reとブラジウス)ではっきり移り変わるわけではない

6㎜管はlog ΔP,log uぐらふよりRe数がｆとあんまり関係なかった(傾き2に近かったため)遷移領域にある。

槽内ながれ

・邪魔板ありの攪拌要動力は一回下がってからNｐmaxに漸近する

　→今回は漸近しかけ？あがってきたところあたり

　実験指針の図からも、邪魔板ありの攪拌要動力が無しの線を上回ることはない

　混合時間は攪拌要動力が大きいほうが短い(45式のNpが分母にくるから)→まざりやすい

　↑の相関は超高粘度の層流についてはなりたたない→46式

　46の攪拌Re数が小さい→超ねばっこい／かたまりができる

混合時間はなぜNpが大きいほうが短いのか？

Npが小さい→攪拌翼が流体に与えている運動エネルギーが小さい→流体あんまり動いてない(運動エネルギー小さい)→あんまり混ざってない

＝＞Npを上げる邪魔板は有効！！

層流(グリセリンのときとか)→Npは流体が攪拌翼に与える抵抗力によって大きくなっている(チャリのめっちゃおもいギア踏んでるときみたいな)→Npと流体の動き関係ない→46式のあとのやつ